

草

食と云われる菓子金を食う。

これは、「オリックススマネー」川柳の入選句のひとつだが、今日「サラリーマン川柳」などメディアが取上げたり、企業イメージの発信に用いたりする「公募川柳」が盛んである。かつてのように「かわやなき? そりや、お茶の銘柄かい?」などというような人はいなくなり、社会でも広く知られ、テレビやラジオ、新聞などで川柳を愉しむ人が増えた。あの意味「川柳ブーム」ということもできよう。しかし、その文芸名が江戸時代の一人の点者(選者)名に由来することとは、あまり社会では知られていない。

今年、初代川柳没後二百二十年に当るが、川柳という(名)の登場は、さらに瀧り宝暦七年(二七五七)八月二十五日。二五三年前のことである。

江戸は、浅草新堀端・天台宗龍宝寺門前に住み、前句附万句合を募集、句を選んだ柄井八右衛門の俳号「川柳」が、その発表された作品の面白さから、後に文芸名にもなったもので、この人の選句眼なくして文芸の(川柳)は生まれ得なかつた。(孝行のしたい時分に親はなし)や(相性は聞ききたし年は隠したし)などは、川柳というより耳慣れた(成語)として日常に活用している。これらは初代川柳が選んだ句

が、江戸庶民の耳から耳へ共感として伝わり広がったものである。

この「共感」こそ、川柳のもつ本質のひとつで、誰が作った句であるとうようなことは問題にもならず「おおつ、うまいことを言うねえ」と膝を打ったとたん、その句は作者のものだけでなく読者の共有物ともなる。

初代川柳は、万句合興行で集まった多くの句の中から、それまでの俳諧の気分の中でも発句的あいさつではなく、平均的人事の面白さを選んだというが、そこには、江戸市中に募集を絞ったという背景も影響している。軒から月が昇り、戸を開ければ人・人・

人の顔しか見えない百万都市・江戸。そういう地域性が当然のこととして自然をベースとした花鳥風月ではなく、眼前のニンゲンを直接見詰める(目)を作品世界にもたらしめた。

初代川柳没後、いく度か川柳消滅の危機はあったが、二五〇年後の今日まで(川柳)が続いているのは、ニンゲンの間の共感の面白さが支えてきたのだろう。明治以降は江戸のローカル文芸ではなく全国的なものとなった。当然、作者の背負った地域性のある幅広い作品世界も生れてきている。が、その本質は、ニンゲンというものを凝視し、そこに生まれる生きることの中の矛盾、こわばり、さらには喜怒哀楽などが描き続けられている。

(家を買ってそれから何も買っていない) (サラリーマン川柳) など私も身につまされる思いで読んだが、全国の都市化が進み首都も地方も変わらなくなつた今日、川柳の目は(江戸人)だけではなく全国民のものとなり、ストレスの多い現代社会では、川柳を作つたり読んだりすることによる精神の浄化作用が、いよいよ有効になってきた。

私は、川柳発祥の地(お江戸)を引き継ぐ(東京人)のひとつりとして、川柳という小さな文芸に誇りをもって生きていく。

随筆

川柳は「お江戸」生まれの都市文芸。

尾藤一泉

川柳家

Text by Issen Aita

ぴとつ、いっせん「一九六〇年東京生まれ。卒業後西村メーカー研究室勤務。

川柳に生きるため脱サラ。現在女子美術大学、武蔵野美術大学ほか非常勤講師。

十五歳より川柳をはじめ「川柳公論」編集員から川柳学会を創設。「川柳さくらぎ」主宰、

川柳展の「プロフェッショナル」(http://www.doctor-senryu.com/)「ドクター川柳」など川柳文化の発信に努める。編著書に「川柳総合大辞典」「館杉の川柳と叫び」ほか。

